

再処理プロセス・化学ハンドブック第2版 (JAEA-Review 2008-037) 正誤表
(List of errata)

page		Error	Correct
1章 基礎物性			
p. 4	式 1.1-6	1.0003124	1.003124
p. 5	式 1.1-8	1.3128×10^{-3}	1.31218×10^{-3}
p. 8	式 1.1-13B	出典が不明	削除
p. 14	式 1.1-22	1.53588×10^{-5}	1.53588×10^{-6}
p. 19	式 1.1-31 式 1.1-31	3.97946	3.94916
p. 20	引用文献 10)	化学便覧 基礎編 II	化学便覧 基礎編 I
p. 20	引用文献 11)	Kovats, E. <u>sx</u> ,	Kovats, E. <u>sz</u> ,
p. 20	引用文献 11)	Density and Surface Tension of <u>Organic Liquids</u>	Density and Surface Tension of 83 Organic Liquids
p. 20	引用文献 11)	11) 館盛	12) 館盛
p. 20	引用文献 12)	12) 柴田	13) 柴田
p. 24	本文	以下の Sutherland の式	以下の Sutherland の式及び Wilke の式
p. 24	式 1.2-9 () 内	$\sum y_j \Phi_{ij}$	$y_i + \sum y_j \Phi_{ij}$
p. 27	式 1.2-15	-0.023	-0.0023
p. 27	式 1.2-15	CHNO ₃ [...] : 硝酸ウラニルモル濃度	CHNO ₃ [...] : 硝酸モル濃度
p. 27	図 1.2-3	推算式 1.2-15 に誤り	削除 (硝酸濃度が大の時に粘度が大となる)
p. 28	図 1.2-4	推算式 1.2-15 に誤り	削除 (")
p. 28	表 1.2-4	3.32、 <u>3.29</u> 、3.35、3.32	3.32、3.209、3.35、3.32
p. 29	式 1.2-17	$\log_{10}(\eta_{mix}) = \phi_{TBP} \cdot (0.345 + 0.36 \cdot \phi_{TBP}) + \phi_{Dil} \{ \log_{10}(\eta_{Dil}) - 1 \}$	$\log_{10}(\eta_{mix}) = \phi_{TBP} \cdot (1.345 + 0.36 \cdot \phi_{TBP}) + \phi_{Dil} \{ 1 + \log_{10}(\eta_{Dil}) \} - 1$
p. 30	図 1.2-6	25°C以外のプロット (15, 30, 50, 60, 80°Cのプロット)	削除 (式 1.2-17 は 25°Cの式)
p. 34	引用文献 5)	Maare, J. O.	Moore, J. D. (他節も同様)
p. 34	引用文献 5)	RHO-MA-116 (粘性推算式に誤記がある)	原典である Burger, et al., HW-11276 (1949) を引用すべき
p. 37	表 1.3-2	$19.2 \times 12 = 110.4$	$9.2 \times 12 = 110.4$
p. 37	本文	iii) 懸濁法	iii) 懸滴法
p. 39	表 1.3-5 硝酸の重量%	4.21, <u>8.61</u> , 14.99, <u>34.84</u>	4.21, 8.64, 14.99, 34.87
p. 39	式 1.3-7	72.68	72.67
p. 40	表 1.3-8	水飽和 TBP-空気, 42.1 及び TBP 飽和水-空気, 35.6	原典 Leroy, CEA-R-3207 によれば 20°C
p. 47	式 1.4-7	の蒸気圧	蒸気圧

p. 50	表 1.4-3 20°C a ₁ 値	6.6898×10^{-4}	6.3898×10^{-4}
p. 51	表 1.4-4, 25 wt%, 70°C	水 157	187
p. 51	表 1.4-4, 35 wt%, 45°C	硝酸 0.25	0.28
p. 51	表 1.4-4, 70 wt%, 110°C	水 270	278
p. 60	引用文献 1)		p. II-150 を追加
p. 60	引用文献 2)	p. 62	p. 76
p. 60	引用文献 4)	Maare, J. O., ... p. 54	Moore, J. D., ... pp. 53 - 54
p. 61	本文	定積比熱を考慮するのはは	定積比熱を考慮するのは
p. 78	表 1.10-2, NaH ₂ PO ₄	0305	0.305
p. 79	表 1.11-1, TBP	- 80	< - 80
p. 79	表 1.11-1, N ₂ H ₄ -H ₂ O	- 40	< - 40
p. 80	本文	1.853 K	1.853 K kg mol ⁻¹
p. 80	表 1.11-4 硝酸, 凝固点	-7, -15, -29, -28, -21, -22, -34	-7, -17, -35, -30, -21, -23, -40
p. 104	表 1.14-5 最下行	1 M ⁸⁾	1 M ⁴⁾
p. 118	図 1.14-39 第 1 グラフ	Pu(IV), U(VI)濃度の列記順	並びが逆で、本来高濃度でのピークが高くなる。
p. 120	図 1.14-40 第 1 グラフ	同上	同上
p. 140	引用文献 2)	(1973)	(1977)
p. 140	引用文献 4)	I. S. Serguei, M. R. Brian, J. L. Gregg, P. H. Benjamin, R. H. James, W. P. Bevin	S. I. Sinkov, B. M. Rapko, G. J. Lumetta, B. P. Hay, J. E. Hutchison, B. W. Parks
p. 160	図 1.16-6	¹⁰⁶ Ru	¹⁰⁶ Rh (Ru と Rh が逆)
p. 160	図 1.16-6	¹⁰⁶ Rh	¹⁰⁶ Ru
p. 162	図 1.16-8	²³⁹ Pu	²⁴⁰ Pu (²⁴⁰ Pu と ²³⁹ Pu が逆)
p. 162	図 1.16-8	²⁴⁰ Pu	²³⁹ Pu
2章 前処理			
p. 171	図 2.1-1 右縦軸の目盛	104, 105	10 ⁴ , 10 ⁵
p. 175	引用文献 2)	(1993)	(1973)
3章 溶解特性			
p. 181	式 3.1-10	W(t)	W(t) / dt
p. 183	表 3.1-1, Taylor 式	Talor et al.	Taylor et al.
p. 183	表 3.1-1, Taylor 式	IDR > 4 mg cm ⁻² min ⁻¹	IDR > 4 mg cm ⁻² min ⁻¹ かつ C _H > 10 mol L ⁻¹
p. 183	表 3.1-1, Uriarte 式	$4 \times 10^7 (C_{HF})^{1.4} e (...)$	$4 \times 10^7 (C_H)^4 (C_{HF})^{1.4} e (...)$
p. 184	表 3.1-1, Fukasawa 式	Fukasawa et al. (1990)	Fukasawa et al. (1991)
p. 184	表 3.1-1, 右辺	2.81	2.8
p. 184	表 3.1-1, Ikeda 式	温度別 k ₁ , k ₂ の一覧表	削除
p. 184	表 3.1-1, Swanson 式	未照射, 照射済 U 金属	未照射 U 金属
p. 185	図 3.1-2 (a)	位置(0.17, 1.0) のプロット点	削除
p. 189	表 3.1-2, Homma 式	Temp.: 80 - 100°C	Temp.: 80 - 105°C
p. 196	3.2 節 本文等	Kleykamp, H.	Kleykamp, H.
p. 198	表 3.2-1(1) Lerch の Pu	1 - 4.6, 0.2 - 1.7, <0.2 等	残渣中の U+Pu と溶解前 U+Pu 重

	値		量の比[%]を記載している。これは実験に基づいた推算モデルによる値。
p. 201	表 3.2-1(4), Ochsenfeld 線出力値	360 W/cm	360 - 480 W/cm
p. 201	表 3.2-1(4), Ochsenfeld, Pu 値	3.5 - 4.7	3.5 - 5.7
p. 201	表 3.2-1(4), Wilkinson, Ce-144 値	0.05 - 0.03%	0.05 - 0.3%
p. 211	本文	Baestle ら(1979) ^{1 0)}	De Regge ら(1979) ^{1 0)}
p. 211	本文	Wilkinson ら(1979) ^{1 3)}	Crofts ら(1979) ^{1 3)}
p. 212	本文	CYRANO における実験室規模	La Hague, Marcoule 施設における実規模
p. 218	図 3.2-9	Rh _{0.5} Pd _{0.5} のモル分率の 目盛上端, 0	1
p. 219	図 3.2-10	□ FBR 燃料	□ This Study
p. 220	表 3.2-3 最下部	Mo _{0.35} Ru _{0.20} Pd _{0.15} Rh _{0.15}	Mo _{0.35} Ru _{0.35} Pd _{0.15} Rh _{0.15}
p. 220	〃	Mo _{0.10} Ru _{0.20} Pd _{0.15} Rh _{0.15}	Mo _{0.10} Ru _{0.63} Pd _{0.135} Rh _{0.135}
p. 220	表 3.2-3 最下行	1×10 ⁻²	5×10 ⁻²
p. 224	図 3.3-2 タテ軸	目盛り間隔が不適切	Sb-125 の放射能濃度は 10 ⁴ , H-3 は 3×10 ³ , Co-60 は 3×10 ²
p. 226	表 3.3-1 アクチノイド 元素	U, Obrigheim, 430~1140 U, Stade, 2520 Pu, Stade, 14.1 Pu, Stade, 23.3	430~2390 2940 13.1 26.3
p. 227	図 3.3-4 (a)	Ru-103	Ru-106
4章 オフガス			
p. 252	図 4-2 右上部	～処理設備 (図 4-6) から	(図 4-4)
p. 253	図 4-3 右上部	～処理設備 (図 4-7) へ	(図 4-5)
p. 255	本文	(Fumoto ら(1986)) ⁴⁾	(Fumoto ら(1986)) ⁵⁾
p. 255	本文	(Henrich ら(1987)) ⁵⁾	(Fumoto ら(1986)) ⁶⁾
p. 256	表 4.1-1 Henrich ら	10 m ³ (t-U) ⁻¹ とする	1000 m ³ (t-U) ⁻¹ とする
p. 256	表 4.1-1	H ₂ O : 4 - 7 vol%	H ₂ O (HNO ₃) : 4 - 7 vol%
p. 256	本文	Campbell と Buxston(1976) ⁶⁾	Campbell と Buxston(1976) ⁷⁾
p. 256	本文	Leudat ら (1983) ⁷⁾	Leudat ら (1983) ⁸⁾
p. 256	本文	古牧ら(1991) ⁸⁾	古牧ら(1991) ⁹⁾
p. 256	本文	挙動を調べている ⁶⁾	挙動を調べている ⁷⁾
p. 257	表 4.1-2, 4.1-3, 4.1-4	Campbell ら(1976)による ⁶⁾	Campbell ら(1976)による ⁷⁾
p. 258	本文	物質収支を求めた ⁷⁾	物質収支を求めた ⁸⁾
p. 258	本文	10 ⁻³ ~10 ⁻² %が放出	10 ⁻⁴ ~10 ⁻² %が放出
p. 258	本文	挙動を報告している ⁸⁾	挙動を報告している ⁹⁾
p. 258	本文	(Sakurai ら(1992)) ⁹⁾	(Sakurai ら(1992)) ^{1 0)}

p. 260	本文	20～30%のヨウ素	8～11%のヨウ素
p. 262	本文, AgI と HIO ₃ の 化学反応式	2 I ₂ + ...	3 I ₂ + ...
p. 263	本文	0.05%であったと	0.05%未満であったと
p. 264	表 4.2-1 AgA, 温度欄	～130	～150
p. 264	表 4.2-1 AgA		吸着容量の単位 mg-I cm ⁻³
p. 264	表 4.2-1 AgA	Ag : 12 wt%	Ag : 10 wt%
p. 264	表 4.2-1 AgP, 温度欄	≦110	～130
p. 264	表 4.2-1 AgA	吸着容量の単位及び化学形	mg-I g-SDB ⁻¹ , 化学形は CH ₃ I のみ
p. 265	本文	採用しており、図 4.2-3 に示す 構成になっている。	採用している。(THORP に関 する図はない)
p. 266	本文	Herrmann ら(1993)	Herrmann ら(1997)
p. 266	本文	Herrmann ら(1996)	Herrmann ら(1997)
p. 270	本文	江口ら(1992)は	谷垣ら(1992)は
p. 272	引用文献 13)	(1996)	(1997)
p. 272	引用文献 14)	Proc. of the 23rd DOE/NRC Nuclear Air Cleaning Conf.を引 用	Hattori, S. et al., Proc. 18th DOE Nuclear Air Cleaning Conf., CONF-840806, 1985, pp. 1343 - 1360.
p. 272	引用文献 19)	CONF-902083	CONF-920823
p. 272	引用文献 20)	p. 609 (1996)	p. 618 (1997)
p. 274	表 4.3-1 標題	軽水炉使用済燃料に含まれる	軽水炉使用済燃料の再処理に よって発生する高レベル放射 性廃液に含まれる
p. 277	式 4.3-3	3.36×10^{13}	3.63×10^{13}
p. 278	本文	(2) で述べたことから	(1) で述べたことから
p. 280	図 4.3-5	模擬廃液の硝酸モル濃度 3 mol l ⁻¹	2.65 mol l ⁻¹
p. 283	図 4.3-6	液体 Tc ₂ O ₇ の蒸気圧推算値 (式 4.3-14 に基づく破線)	計算に誤り。正しくは測定値 (○) にほぼ一致
p. 283	本文	図 4.3-4 に示した RuO ₂ の場合 と … 6 桁低い値となる。	文を削除
p. 284	図 4.3-7	Tc ₂ O ₇ 分圧計算値プロット	計算に誤りがあり、正しくは 120 °Cで約 3×10^{-6} Pa
p. 284	表 4.3-5 酸化セシウム	400°Cで、単体と過酸化物に分 解	350～400°Cで、過酸化物と金 属に分解を始める
p. 284	表 4.3-5	大気中で金属を燃焼させた時 の生成物	削除
p. 284	表 4.3-5 水酸化セシウ ム	273.2°C	272.3°C
p. 286	引用文献 2)	p. 63 (1970)	p. 244 (1970)

p. 286	引用文献 13)	化学大事典	化学大辞典
p. 288	式 4.4-2 単位	10^3 Pa	$(\text{kPa})^{-1}$
p. 288	式 4.4-3 分子	6781	6780
p. 288	式 4.4-5 分子 (2ヶ所)	2073	2072
p. 288	式 4.4-5 単位	10^3 Pa	$(\text{kPa})^{-1}$
p. 288	式 4.4-6	7.58×10^{-10}	75.8×10^{-9}
p. 288	式 4.4-8 単位	10^3 Pa	$(\text{kPa})^{-1}$
p. 289	式 4.4-12	NO 溶解量が諸文献の値と一致しない	削除
p. 291	本文	水溶液中における反応 ⁴⁾	水溶液中における反応 ⁵⁾
p. 291	式 4.4-19 左辺の分子	$d c_{\text{NO}_2, \text{aq}}$	$d c_{\text{O}_2, \text{aq}}$
p. 291	本文	0.0013~30.4 Pa	2.5~85 kPa
p. 294	本文	時間変化 ⁴⁾	時間変化 ⁵⁾
p. 297	引用文献 3)	反応吸収を中心とする	反応・吸収を中心にする
p. 300	本文	冷凍庫内 (図中の破線で囲んだ部分)	削除
p. 303	引用文献 6)	(1982)	(1983)
p. 303	引用文献 7)	齊藤恵一郎	齊藤恵一郎
p. 306	本文	$29 \text{ GMWd} \cdot \text{t}^{-1}$	$29 \text{ GWd} \cdot \text{t}^{-1}$
p. 313	引用文献 8)	Mulkelwits, H. R.	Munkelwitz, H. R.
5章 抽出特性			
p. 318	表 5-1(3) Cs-134/Cs-137 設計値	8.7×10^5	6.5×10^8
p. 318	表 5-1(3) Ce-144 設計値	8.7×10^5	3.3×10^7
p. 318	表 5-1(3) Np-237 設計値	8.7×10^5	1.5×10^4
p. 318	表 5-1(3) Pu 設計値	8.7×10^5	5.0×10^6
p. 319	表 5-1(5) U 実績値	$5.8 \times 10^8 \sim 7.1 \times 10^8$	$5.8 \times 10^6 \sim 5.6 \times 10^8$
p. 319	表 5.1(5) U 設計値	2.1×10^8	2.1×10^5
p. 319	表 5.2(1) U 中の Pu 濃度, 実績値	$10 \mu \text{ g-Pu/kg-U}$	$< 10 \mu \text{ g-Pu/kg-U}$
p. 319	表 5.2(2) Np 除染係数	設計値	仕様値
p. 319	表 5.2(2) $\beta \gamma$ 放射能濃度	実績値 $74 \text{ kBq} (2 \mu\text{Ci})/\text{kg-U}$ 仕様値 $925 \text{ kBq} (25 \mu\text{Ci})/\text{kg-U}$	実績値 $< 74 \text{ kBq} (2 \mu\text{Ci})/\text{kg-U}$ 仕様値 $< 925 \text{ kBq} (25 \mu\text{Ci})/\text{kg-U}$
p. 319	表 5.2(3) FP の除染係数	設計値	仕様値
p. 319	表 5.2(3) $\beta \gamma$ 放射能濃度	実績値 $37 \text{ kBq} (1 \mu\text{Ci})/\text{kg-U}$ 仕様値 $296 \text{ kBq} (8 \mu\text{Ci})/\text{kg-U}$	実績値 $< 37 \text{ kBq} (1 \mu\text{Ci})/\text{g-Pu}$ 仕様値 $< 296 \text{ kBq} (8 \mu\text{Ci})/\text{g-Pu}$
p. 319	表 5.2(4) 蒸留缶残の $\beta \gamma$ 放射能濃度, 実績値	$7.4 \times 10^6 \text{ Bq} (0.2\text{mCi})/l$	$< 7.4 \times 10^6 \text{ Bq} (0.2\text{mCi})/l$
p. 322	表 5.1-1		U^{4+} , PuO_2^{2+} , Pu^{3+} の平衡定数計算式は Richardson ではなく別の研究者によるもの
p. 325	式 5.1-15 U^{4+}	+7.177	+7.117

p. 329	式 5.1-34 右辺	$\text{NO}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$	$\text{HNO}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$
p. 338 - 339	図 5.2-1, 5.2-2, 5.2-3 の 細実線	式 5.2-16 の計算に誤り	細実線が僅かに上に移動
p. 343	式 5.2-31 右辺	1.6×10^{-3}	3.2×10^{-3}
p. 346	本文	生成と壊変を以下に示す ¹⁾ 。	生成と壊変を以下に示す。
p. 347	表 5.3-1 標題	Np の化合物 ¹⁾	Np の化合物
p. 365	図 5.3-15	このグラフは Np(VI)でなく Np(IV)のもの	削除
p. 368	表 5.3-5 アリルヒドラジン	46.9 ± 2.4	63.6 ± 1.5
p. 368	表 5.3-5 N,N-ジエチルヒ ドロキシルアミン,	22.6 ± 0.8	68.5 ± 0.9
p. 368	表 5.3-5 N,N-ジブチルヒ ドロキシルアミン (硝酸 溶媒)	71.9 ± 0.2	71.1 ± 0.2
p. 368	表 5.3-5 1,2-ジメチルヒド ラジン	文献 28	37
p. 368	表 5.3-5 ヒドロキシルア ミン	16.5	82.0
p. 369	表 5.3-5 (つづき), ブタナ ールオキシム	25	25.2
p. 370	表 5.3-6 イソプロピルヒ ドラジン		削除
p. 372	式 5.3-61	-7.3×10^3	-4.2×10^4
p. 372	式 5.3-62	-3.1×10^6	-6.0×10^6
p. 384	引用文献 1)	(1983)	(1981)
p. 386	表 5.5-1, 5.5-2 キャプシ ョン及び反応欄	$\frac{1}{4}$	\rightleftharpoons (左右矢印) が文字化け したもの
p. 387	表 5.5-4 A'3 \leftrightarrow C' アコニトラト交換	1.07×10^{-2}	1.67×10^{-2}
p. 387	表 5.5-4 脚注	D' : 2- <u>ジ</u> ニトロ 3,4- <u>ニ</u> トラト 錯体	D' : 2-ニトロ 3,4-ジニトラト 錯体
p. 396	引用文献 4)	Atomic Energy Review, <u>164</u>	Atomic Energy Review, <u>16</u>
p. 400	本文	この項では、An ³⁺	文を削除 (TRUEX 記載なし)
p. 406	本文	経験式 ²⁾ が提案されて	経験式 ³⁾ が提案されて
p. 406	式 5.7-8 D _{Nd} 右辺分子	$0.06271 + \text{C}_{\text{HNO}_3, \text{aq}}^{1.362}$	$0.06271 \cdot \text{C}_{\text{HNO}_3, \text{aq}}^{1.362}$ (乗算)
p. 406	式 5.7-9 D _{Sm} 右辺分子	$0.1228 + \text{C}_{\text{HNO}_3, \text{aq}}^{1.692}$	$0.1228 \cdot \text{C}_{\text{HNO}_3, \text{aq}}^{1.692}$ (乗算)
p. 407	本文	式 5.6-1, 2	式 5.7-1, 2
p. 407	引用文献 4)	TID-4500-R61	DP-1336
p. 414	本文	<u>水酸化ナトリウム</u> 、 <u>炭酸ナト リウム</u> の場合には	炭酸ナトリウムの場合には
p. 414	本文	Na ⁺ イオン濃度と NO ₃ ⁻ イオン	Na / NO ₃ モル比が 1~2 程度

		濃度の比が 1 程度	
p. 414	本文	Zr / シュウ酸のモル比	シュウ酸 / Zr のモル比
p. 414	本文	224 g t ¹	224.5 g t ¹
p. 415	本文	ただし、モル比が 10 … シュウ酸ウラニルが沈殿し、再びエマルジョンが形成される	削除
p. 416	引用文献 1)	Nucl. Technol.	J. Nucl. Sci. Technol.
p. 416	引用文献 2)	Solvent Extraction <u>System</u>	Solvent Extraction Solutions
p. 416	引用文献 6)	Borchardot, J.	Borchardt, J.
p. 423	式 5.9-3 右辺	-84.56	-84.59
p. 424	引用文献 1)	p. 78	p. 178
p. 424	引用文献 2)	pp. 201 - 214	pp. I-201 - I-208
6章 プルトニウム			
p. 508	本文	化学種自体の濃度には依存しないと考えられている	削除
p. 510	引用文献 1)	Kerntechnik, <u>6</u>	Kerntechnik, <u>18</u>
p. 513	本文	必ずしも <u>明らか</u> ではないが	必ずしも明らかではないが
p. 515	本文	求める経験式として ³⁾	求める経験式として ²⁾
p. 516	本文	ポリマーが沈殿となった場合の再溶解	ポリマーの再溶解
p. 516	本文	～の混酸中、加熱することで	～の混酸を添加するか、又は加熱することで
p. 517	引用文献 5)	(1962)	(1963)
p. 517	引用文献 6)	Oak Ridge-TN 37830	誤記, 削除
7章 高レベル廃液			
p. 518	表 7.1-1, 7.1-2, 7.1-3 ～521 廃液の組成		実際の組成ではなく想定組成であることに注意
p. 528	本文	$1.63 \times 10^{-15} \text{ s}^{-1}$ であるので ²⁾	$1.63 \times 10^{-15} \text{ s}^{-1}$ であるので ¹⁾
p. 529	表 7.3-1 共除染工程 塔槽類等	2.9×10^9	2.8×10^9
8章 放射線分解			
p. 532	本文	0.17 ± 0.06 ⁴⁾	0.17 ± 0.06 ⁸⁾
p. 532	表 8.1-2 標題	(Pu-238 が 80%)	誤記のため削除
p. 534	本文	H ₂ ガス生成 G 値の液深に	H ₂ ガス放出 G 値の液深に
p. 534	図 8.2-2 標題	γ線による H ₂ ガス生成 G 値	γ線による H ₂ ガス放出 G 値
p. 534	本文	H ₂ ガス生成 G 値の温度に対する依存性	H ₂ ガス放出 G 値の温度に対する依存性
p. 536	本文	亜硝酸の生成 G が	亜硝酸の生成 G 値が
p. 536	図 8.2-4 Po-210 のプロット	初期 G 値なので、他のデータとの比較は不適切	削除
p. 539	本文	O ₂ ガス生成 G 値は大きくな	O ₂ ガス生成 G 値は大きくな

		る ⁴⁾	る ¹¹⁾
p. 539	引用文献 5)	p. 42	p. 744
p. 539	引用文献 10)	p. 71	p. 711
p. 539	引用文献 11)	Ershava, Z. V.	Ershova, Z. V
9章 溶媒劣化			
p. 542	本文	一つの目安の値としては … 30 Wh ^l 以下である ³⁾	一つの目安の値としては … 30 Wh ^l 以下である (出典非公開)
p544	本文	1-ブタノールの生成 G 値が低下することも	1-ブタノールの生成 G 値が上昇することも
p. 545	図 9.1-2 第 1 グラフ 水素生成 G 値	グラフのプロット位置が全体的に上下にずれている。	横軸値 0 % のとき約 6.7, 100 % のとき約 2.0
p. 553	式 9.2-3 左辺	$t_{1/2}$	$t_{1/2}$
p. 570	引用文献 1)	pp. 33-34	pp. 25-67
10章 自己反応性物質			
p. 572	本文	<u>Savanna</u> River	Savannah River
p. 574	図 10.1-2	4) 3.83	4) 3.38
p. 583	表 10.1-6	2.2×10^{-4}	2.8×10^{-4}
p. 586	表 10.1-8 最下行	温度 <u>90</u> , $k_{1,mix,1}$ <u>4.3×10^{-3}</u>	温度 96, $k_{1,mix,1}$ 4.4×10^{-3}
p. 590	図 10.1-15	2 相系のプロット (□)	計算ミスのため削除
p. 591	本文	TBP の物質質量基準で <u>441</u> l mol ⁻¹	ドデカンの物質質量基準で <u>440</u> l mol ⁻¹
p. 591	本文	硝酸の物質質量基準で <u>42.7</u> l mol ⁻¹	硝酸の物質質量基準で 33.4 l mol ⁻¹
p. 595	表 10.1-12 定圧系	硝酸濃度 3.3	3.36
p. 613	式 10.2-1	P_{HN_3}	$\log_{10} P_{HN_3}$
p. 614	本文	TcO ₄ ⁺ が共存した場合	TcO ₄ ⁻ が共存した場合
p. 620	引用文献 5)	(1988)	(1984)
11章 コードによる挙動推算			
p. 635	本文	以下の式で与えられる	以下の式で与えられる
p. 636	本文	暴露 (2 か所)	ばく露
p. 639	本文	右側(a)は 90° 刻みで	右側(b)は 90° 刻みで
p. 641	本文	図 11.2-3~11.2-6 (図番号が重複)	図 11.2-5~11.2-8
p. 642	図番号	図 11.2-3, 図 11.2-4	図 11.2-5, 図 11.2-6
p. 643	図番号	図 11.2-5, 図 11.2-6	図 11.2-7, 図 11.2-8
p. 644	本文	図 11.2-7~11.2-10	図 11.2-9~11.2-12
p. 645	図番号	図 11.2-7, 図 11.2-8	図 11.2-9, 図 11.2-10
p. 646	図番号	図 11.2-9, 図 11.2-10	図 11.2-11, 図 11.2-12
p. 647	図番号	図 11.2-5, 図 11.2-6	図 11.2-7, 図 11.2-8
p. 649	式 11.3-8 右辺	5 HNO ₂ (liq.)	5 HNO ₃ (liq.)
p. 652	本文	(6) NO _x 吸収塔 (ヨウ素~	(7) NO _x 吸収塔 (ヨウ素~
p. 653	図 11.3-2 溶解槽液相	0.204 Nm ³ /h (2 か所)	0.204 (単位なし)

(連続溶解)			
p. 654	本文	高さ z	位置 z
p. 658	図 11.3-7 縦軸	iodine-kg/AgS-kg	kg-iodine / kg-AgS
p. 659	図 11.3-9 標題	<u>Hattori らによる</u> ヨウ素吸着試験	NUCEF におけるヨウ素吸着試験
p. 662	引用文献 7)	(1992)	(1975)
p. 665	式 11.4-2	$1 + 0.00609 W_{LT}$	$1 - 0.00609 W_{LT}$
p. 665	式 11.4-4	-173.15	-273.15
p. 665	本文	<u>(3)</u> フリー-TBP 濃度計算式	(2) フリー-TBP 濃度計算式
p. 666	本文	<u>(4)</u> 硝酸根濃度計算式	(3) 硝酸根濃度計算式
p. 677	式 11.4-29 速度式右辺	$x_{Pu(IV)}$	$x_{Pu(IV)}^2$
p. 677	式 11.4-30 反応式	$\text{Pu(III)} + 3 \text{H}^+ + \text{NO}_3^- \rightarrow 2 \text{Pu(IV)} + \underline{2} \text{HNO}_2 + 2 \text{H}_2\text{O}$	$2 \text{Pu(III)} + 3 \text{H}^+ + \text{NO}_3^- \rightarrow 2 \text{Pu(IV)} + \text{HNO}_2 + \text{H}_2\text{O}$
p. 677	式 11.4-30 速度式右辺	$0.44 - \underline{1.8} \log_{10} x_{H^+}$	$0.44 - 0.76 \log_{10} x_{H^+}$
p. 681	式 11.4-48 速度式左辺	$\underline{Y}_{U(IV)}$	$y_{U(IV)}$
p. 684	図 11.4-2	図 11.4-3 と同じ図	図 11.4-2 を削除
p. 689	引用文献 47)	p. 267	p. 31
p. 689	引用文献 48)	Goulise, D.	Gourisse, D.
付録-1			
p. 695	本文	式(13)	式 A.1-13
付録-2 変数の算出			
p. 700	本文	$\varepsilon_{12}/\kappa = \underline{55.0}$ (K)	$\varepsilon_{12}/\kappa = 550$ (K)
p. 700	本文	$d_{\text{AgNO}_3} = 4.352$	$d_{\text{AgNO}_3} = 4.352 \times 10^3$
p. 700	本文	$d_{\text{SiO}_2} = 2.650$	$d_{\text{SiO}_2} = 2.650 \times 10^3$
p. 700	本文	$d_{\text{O}_{\text{AGS}}} = \dots = 2.861 \times 10^{-3}$	$d_{\text{O}_{\text{AGS}}} = \dots = 2.861 \times 10^3$
p. 701	本文	$(1 - \varepsilon_b) \underline{d}_{\text{AGS}} = 719$	$(1 - \varepsilon_b) \times d_{\text{AGS}} = 719$
p. 701	本文	式(14)、(15)および(16)より、	削除
p. 702	本文	D_{ea}	D_{ab}
p. 702	引用文献 2)	(1992)	(1975)
p. 702	引用文献 4)	(1996)	(1997)